

共に未来を育てるために

進路指導の現場から

第10回

2020年度に向けて 指導方針を統一

——貴校の進路指導の取り組みについて教えてください。

本校は普通科、国際教養科を設置する公立高校です。1学年の生徒数が330人程度で、8割以上が4年制大学に進学します。

今、本校では若手教員を中心に「将来構想委員会」という組織を

つくり、進路指導の見直しを行っています。2020年度に予定されている大学入試改革に向け、教員全員が足並みをそろえて指導にあたるのが大切だと考えているからです。

具体的には、委員会が中心となつて3年間の指導の流れをまとめたコンセプトマップ「**枚高マップ**」を作成し、全教員に配付しています。この資料はA3の紙1枚

に「3年間の学校行事」「学年ごとの指導テーマ」「育てたい生徒像」「具体的な指導の内容と目的」を図表化し、まとめたものです。以前の進路指導は学年ごとに行われていたため、指導バラつきが見られました。今は「**枚高マップ**」をベースにして、全学年、全教員が同じ方針に沿って、指導にあたることができるようになりました。

入試改革への対応を進めるために 進路指導のあり方を可視化し共有



ひらかた
大阪府立枚方高校
進路指導主事

富田 哲司

とみたてつじ ●教員歴35年。同校に赴任して15年目。「小さな「疑問」や「気づき」が生まれる授業を心がける」がモットー。専門科目は国語。

教科指導に関しても、「教科スタンダード」という資料を作成中です。「**枚高マップ**」と同じように、各教科・科目の「単元ごとの学習時期」と「生徒の到達目標」を1枚の紙にまとめ、3年間の教科指導を可視化しています。教員はこれを確認することで、自分の担当以外の教科・科目の学習内容と進度を把握できるので、個人面談時に、生徒に学習ベースに関する具体的なアドバイスをしたり、受験科目選択の相談に乗ったりすることが可能になります。

ポートフォリオを導入し 振り返りの機会をつくる

——入試における英語4技能評価への対応は進めていますか？

本校には国際教養科があり、もともと英語教育に力を入れていま

長プロセスの評価に各大学が取り組んでほしいと考えています。

——そのほか、大学への期待をお聞かせください。

「どの科目も全て得意」という高校生はほとんどいません。しかし、一つ飛び抜けた得意分野を持っている生徒はたくさんいます。大学は、そのような生徒が自分の興味を伸ばして成長できる場所であってほしいと願っています。多面的・総合的評価はそうした生徒の入学につながっていくのだと思います。

また、大学は、高校生から見て魅力的な場所であってほしいですね。ユニークな研究に取り組んでいる教員や個性的な学生など、多様な人たちを受け入れる懐の深さを期待しています。

まとめ

高校は入試改革に向けて
進路指導のあり方を見直している

最終的な成果以外に
成長のプロセスにも
着目し評価してほしい

高校訪問 ワンポイントアドバイス

知りたいのは、その大学に通う 等身大の学生の姿

大学の皆さんは、入試制度や奨学金、施設の情報などを伝えてくださいますが、私たちが知りたいのは、学生の等身大の姿です。「どんな個性を持った学生が通っているのか」「どのような生活を送っているのか」など、周辺環境を含め具体的にイメージできる情報がほしいですね。それがあると生徒も進学後の未来像が描きやすいと思います。

●大阪府立枚方高校 ▶1963年開校 ▶普通科、国際教養科の2学科 ▶教育方針は「自主・自律」「誠実・勤勉」「清新・進取」▶国際交流に力を入れ、夏期休業中にオーストラリアでの語学研修を行うほか、留学生も受け入れている ▶2016年度の合格実績は国公立大学6人、私立大学の主な合格実績は、近畿大、龍谷大、関西大、摂南大、京都産業大など。

す。全生徒が参加するスピーチコンテストを実施し、英語でアウトプットする機会も設けています。このコンテストには大学教員も招き、審査をしていただいています。民間の外部英語資格・検定試験への新たな対応については、今はまだ情報収集の段階です。大学側の方針が発表されてから検討したいと考えています。特に本校の生徒が多く進学する関西圏の私立大学が、どのような形で入試に導入するのか、注目しています。

——そのほかに進めている取り組みはありますか？

「総合的な学習の時間」の見直しも進めています。以前は教科学習に近い内容の授業を行っていた

のですが、2017年度からはテーマ学習に内容をシフトしました。具体的には、キャリアや人権問題、グローバルなどの分野から解決すべき課題を設定し、集団討論やグループワーク、プレゼンテーション等に取り組ませる内容に変えています。

この授業では、2017年度の1年生から紙のポートフォリオの作成にも取り組ませています。授業では一つのテーマに3、4週間かけているのですが、チームが終わるごとに、取り組んだ内容と自己評価、自分自身の変化などをレポートさせています。また、回収したポートフォリオは毎学期終了時にいったん生徒に返却し、学期ごとの振り返りもさせています。

高校の授業は50分と短く、通常の教科授業では振り返りの時間を取ることでできません。そのため、これまでは生徒が授業に対してどう考えているのか、知る機会はほとんどありませんでした。生徒の変化が記載されたポートフォリオの活用は、生徒本人にだけでなく教員にとっても得るものは大きいと思います。



▲「枚高マップ」は教員同士で話し合い、年度ごとに改善している

成果だけでなく プロセスの評価を期待

——ポートフォリオを「主体性等」の評価の一つとして入試に活用しようという動きもあります。

入試に取り組める以上、スコア化の話が出てくると思います。ただ、「生徒会長を経験している生徒は〇点」「部活の部長だった生徒は〇点」という形になってしまつと、本来の目的からはずれてしまつのではないでしょうか。

本校のような一般的な公立高校だと運動部でよい成績を挙げたといつても、府大会で入賞する程度です。しかし、全国レベルの成績を収めるような生徒でなくても、厳しい環境の中でがんばっている生徒はたくさんいます。ハードルは高いと思いますが、入試では成



さとう・まさみ●1956年兵庫県生まれ。大阪大学法学部卒業。同大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得満期退学。摂南大学、甲南大学での非常勤講師を経て、1988年神戸学院大学法学部講師。助教授を経て2002年教授。その間、1993-95年英国リーズ大学客員研究員。法学部長、副学長を歴任し、2016年より現職。専門は刑法（英米刑法、法人の刑事責任）。



神戸学院大学・学長

佐藤雅美

荒波に挑むトップ
私の改革論
No.24

取材・文／仲谷宏 撮影／楠本夏彦

自分が自分の「可能性」に気づくことが大切です。
大学における人材育成は、専門教育を縦軸とし、横軸に教養教育や課外活動など、学生の人間性や主体性、コミュニケーション能力などを育む活動を置いた2軸で捉えられます。縦軸では教員が学生を巻き込むような教育・研究をする、横軸では教職員が大学のさまざまな活動に学生を巻き込んでいく——そうした縦軸と横軸の教職協働により学生は成長し、学びのモチベーションは高まります。

学生が成長を実感できる

大学づくりを推進

「地域の一員として学生が育つ、地域に信頼される大学へ」

学生の伸びしろを信じていることが出発点

大学進学が珍しかった時代には、大学に入学するだけで学生のモチベーションは高まっていた。しかし、大学等進学率が50%を越えている今、大学に進学することは学生にとって普通のことにな

なっています。加えて、希望する大学に合格できなかった不満や偏差値に対するコンプレックスを抱えたままの者もいます。必ずしも全員が高いモチベーションを持って大学に入学しているわけではありません。それでも学生たちは大学での学びに4年間という時間を費やす覚悟を持って入学してきま

す。そうした学生たちの成長の可能性を見据えて教育することは、ユニバーサル化した大学が果たすべき重要な役割だと言えます。

学生の学ぶモチベーションを高めるには、まず、教職員が学生の「伸びしろ」を信じていることです。それが出発点になります。そして、教職員が働きかけることで学生自

社会からの信頼は大学が生き残る条件

18歳人口の減少が再び本格化する中、大学が生き残る方法の一つに、社会から信頼されることが挙げられます。社会から信頼されるには、社会で必要とされている人材を輩出することが肝要です。

グローバル人材の育成を例にとると、高度な語学力を駆使して海外や外資系の企業で活躍する人材も必要ですが、地域の中で国際感覚を持つグローバル化に対応する人材も必要です。地域の大学が地域社会から信頼を得るには、そうした地域人材の育成が求められます。

本学では2018年度から医療・健康・福祉に関わる4学部6学科合同の専門職連携教育（I*PE）が本格スタートします。これも地域に必要な人材の育成をめざすプログラムです。

新学部の開設を果たし発展の基礎を築く

本学は2013年度に「中期行動計画」を策定し、この5年間、多くの改革を行ってきました。

2014年度には現代社会学部を新設しましたが、これは阪神・淡路大震災の震源地に最も近い総合大学として防災面での社会貢献に力を入れてきた教育研究活動が結実したものです。2015年度には本学の国際化を牽引するグローバル・コミュニケーション学部を開設しました。伝統的な学部が多い本学に、こうした新しいタイプの学部が加わることで、総合大学としてさらに厚みを増すことができたと考えています。

さらに共通教育センター、教職教育センター、キャリア教育センターを統合する形で「全学教育推進機構」を整備しました。これにより学修成果の可視化やFDなども全学で統一に行うことが可能となり、学生の教育に大学として

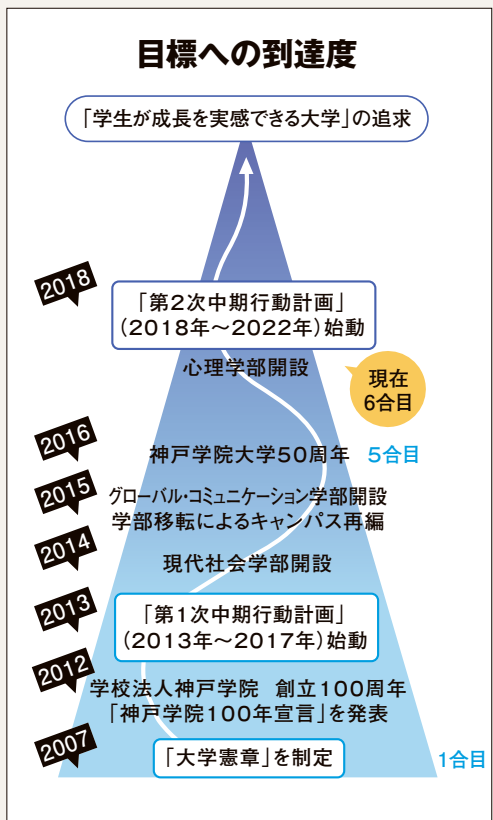
しっかりと責任を持つしくみができ上がりました。

2018年度には、心理学部を新設します。新たに創設された心理専門職の国家資格「公認心理師」の受験資格に対応しており、次年度には大学院を開設予定です。心理学部の新設により、ポートアイランドと有瀬の2つのキャンパスに5学部ずつ、それぞれ文系・理系の学部がバランスよく設置されることとなります。今後は、それぞれのキャンパスの環境や設置学部の特色を生かした教育を深めていきます。

また、2018年度からは、「第2次中期行動計画」がスタートします。2016年度の大学創立50周年の際に公表した「未来50年——神戸学院大学が進むべき道筋」で示した重要課題も本計画に組み込まれています。選択と集中により施策を絞り込み、確実に実行できるように改革を進めていきます。

地域の一員になりその中で学生が育つ

2017年4月に、スポーツ系文化系のクラブが行ってきた地域連携活動を1つにまとめて「神戸学院大学総合型地域スポーツ・文化クラブ」を設立しました。これ



には2つの意義があります。1つは、地域の人々との交流を深化させ、地域における大学の存在感を高めること。もう1つは、学生が地域の中に自分の活動の場を見つけ、地域の発展とともに自分も成長していくことです。

こうした取り組みはクラブ活動だけではありません。2017年に開催7回目を迎えた神戸マラソンには、本学から600人を超える学生がボランティアとして参加しました。地域の大きなイベントに参加し、その成功に貢献することで、多くの学生が「地域の一員になります。知らない人同士、互いに協力しながら活動すること、コミュニケーション能力も磨かれます。」

2017年4月には附属中学校

を開校しました。これにより、その前年度に移転してきた附属高校と合わせて、ポートアイランドに中高大の3つがそろった教育環境を整えることができました。中高大での連携プログラムを企画するなど、オール神戸学院で地域の教育ニーズに応えることにも取り組んでいます。

本学は「学生が成長を実感できる大学」をめざしています。学生が自分の成長を実感できるかどうかは、卒業するときに「この大学に来てよかった」と思えるかどうかにかかっていると言えるでしょう。教職員にとっても、学生の成長が実感できる教育を実践できたかが重要です。この視点を大切に、今後の大学運営を進めていきます。

*Interprofessional Education